近年の南アンデス・ケチュア語口承文学におけるテクスト公刊とその「読み」の可能性

アンデス・アマゾン学会第14回大会
2025年7月6日（日）
藤田　護
（Taller de Historia Oral Andina、慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス環境情報学部）

1．はじめに

もともと、発表者はアイマラ語の口承文学や、アイマラ語のオーラルヒストリーと口承文学の相互浸透を手掛けている
ボリビアの口承文学については、Lucy Jemio González（2025年没）が国立サンアンドレス大学（Universidad Mayor de San Andrés, UMSA）で手掛けていた Taller de Cultura Popular がボリビア各地で大規模な調査を行い、その音声記録と報告書が残されている。*Senderos y Mojones* シリーズなど成果が部分的に書籍化されてきた
記録の全貌は明らかになっていないが（アクセスが容易ではないが）、ボリビア国立民族学・民俗学博物館（Museo Nacional de Etnografía y Folklore, MUSEF）で全音源がデジタル化されてある
Jemio Gonzalez, Lucy (2005) *Senderos y mojones. Literatura oral aymara. Jukumarita*. La Paz: Facultad de Humanidades y Ciencias de Educación, Universidad Mayor de San Andrés.

問題関心――（1）本来アイマラ語の口承文学は「アイマラ語圏」に限定されたものではない。同じモチーフは隣接するケチュア語圏でも見られるものであり、やや視野を広げて検討する必要がある
（ただしアイマラ語圏でしか見られないかもしれないものもある――Jukumari (Juan de oso)はアイマラ語圏ケチュア語圏共通だが、Chuqil Qamir Wirnita はアイマラ語圏でしか見たことがない）
（2）アイマラ語とケチュア語は文法構造と語彙が相当に類似している→アイマラ語の口承文学の語りの特徴が、どこまでケチュア語の口承文学で共有されているかは、重要な検討課題である
（1）（2）それぞれにケチュア語圏の地域内の変異があると考えられる（アイマラ語は南北で大きく2つに分かれるが、口承文学の物語世界についても語りについてもそれほどの差異は見られない）

近年ペルー南部のケチュア語口承文学の記録の刊行が続いている（ただし記録自体はある程度時間が経った過去の記録の公刊である）
（1）
Gutman, Margit. 2023a. *El Qanchi Machu aún vive. Tomo I Cuentos orales quechuas de Pomacanchi*. Arequipa: Ediciones El Lector.
Gutman, Margit. 2023b. *Tomo II Antología de cuentos orales quechuas de Pomacanchi*. Arequipa: Ediciones El Lector.
ポマカンチはクスコ県南部にある。フィールドワークの実施は1980年、博士論文の提出は1996年
（2）
Durston, Alan, César Itier y Pablo Landeo Muñoz. 2024. *Textos quechuas de la zona de Coracora*.

(York University Library: https://yorkspace.library.yorku.ca/items/3b248fd0-409e-411d-8755-dbb1a4884eeb)
執筆は1952年ごろと推定されている。1957年から58年にかけ *Tradición. Revista Peruana de Cultura* 誌に掲載された。元は夏季言語研究所（Instituto Lingüístico de Verano）の言語学者 James Lauriault とクスコ大学の民俗学教授であった Efraín Morote Best の名前で発表されているが、これは元々 Lauriault がリマでケチュア語を学ぶ過程で知り合った Salomon Velazco Yáñez（1927-2001）にケチュア語の記録の執筆を依頼したものとされる→Durston らによる試みは、きわめて読みにくい形式で注釈もなく掲載されたのを、救出しようとするもの
Velazco Yáñez は元の原稿ではアヤクーチョ県南部のコラコラ（Coracora）の出身だとされるが、実際にはルカナス（Lucanas）郡チャビニャ（Chaviña）の出身であるらしい。ただし両者は近接している
編者たちは本文書に収められた証言の広範さを『ワロチリ文書（Manuscrito de Huarochirí）』になぞらえている

※表記は現代の公式表記にして、5 母音表記のものは 3 母音表記に変える（Gutmann は 5 母音表記を用いている）。ペルーの h の表記を採用し、ボリビアの j の表記を用いない。訳は、よりケチュア語を反映した直訳調のものに変更した。

2. 収められている物語の種類と特徴（「物語世界」）

Gutmann (2023b)における物語の分類
I. 山の神（アプ）
II. カンチ・マチュ
III. ソカ・マチュ（ヘンティル）
IV. コンデナード
V. ドゥエンデ（妖精）
VI. 湖（コチャ）
VII. キリスト教にまつわる伝説
VIII. ヨーロッパの物語
IX. 気候現象
X. フアン・エスコペタ
XI. 動物
XII. 個人と村の生活について

Durston, Itier, y Landeo Muñoz (2024)
Pablo Landeo Muñoz による説明
1. 冒頭に人間の物語がある
2. そこから村の成人の祭などの民族誌的な語りが続く
3. その後ろは動物や人間の物語と歌がほぼ交互に続く（p.11）

広域で記録が見られる物語（ただしこのポマカンチ地域特有の設定と展開になっている）と、
ポマンカンチという地域独特の物語とがある
　広域で記録が見られる物語――山、フアン・エスコペタ(?)、ヘンティル、コンデナード、ドゥエンデ、様々な動物

ポマカンチ地域特有の物語――カンチ・マチュ、湖

Gutmann (2023b)における物語の分類

（1）カンチ・マチュの物語――この世界を創出したとされるカンチス集団の文化英雄（machu は「老人」）

Hinaspas chiqaq qanchis chay Qanchi kasqa.（p.76）

（Siendo así verdadero qanchis ese Qanchi (Machu) había sido.）←集団の本質を体現する存在

他の「マチュ」らと関わりながら物語が展開する、石（土木工事）を操る→ワカたちの物語（神話）とよく似ている

インカらの支配と関与しつつ、インカの意向に完全には従わない→『ワロチリ文書』におけるワロチリの地域のワカたちの振る舞いと似ている

Hinas Qanchi Machu ikhurimuqtin, chinkarapullantaq. Qanchi chinkarapullantaqsi. Hinaspas renegaymanta Inkakunaqa pasakapusqa. (p.72)

(Así, dicen, Qanchi Machu apareciendo, ya se pierde. Qanchi, se pierde, dicen. Así, dicen, de renegar los incas se habían ido.

カンチ・マチュが（土木工事などに向けて）動員をかけると当時の人間はすぐに駆けつけて協力をした

今の人間たちは、カンチ・マチュの子どもという位置づけになる

※アイマラ語圏にもトゥヌパの神話、文化英雄としてのインカ

（2）山岳神（apu）の物語――

アプはビクーニャを人間にとってのリャマのように使っている

Hinaspan chay wik'uñakunas, chay linajekunaq wik'uñansi, llamansi cargayukuspas tuta purin. (p.36)

(Siendo así, esas vicuñas, dicen, de esos linajes su llama, dicen, su llama, dicen, cargando, dicen, de noche camina.)

アプは人間の病気を治すことができる

"Arí, khaynatan, khaynatan nuqayku unquyku. Chaymi, arí, linajey, linaje wahachikamuykiku. [...]" "Imaynataq mana nuqari hampiymanchu. Bueno, makillaywanyá llamp'isaq." (p.32)

("Sí, así y así nosotros nos hemos enfermado. Eso sí, mi linaje, linaje hemos hecho llamar. [...]"

"¿Y cómo yo no voy a poder curar? Bueno, con mi mano nomás pues tocaré.")

→シャーマンに呼び出されることで山岳神との直接のやり取りが直接接触が可能になる（人間の形で出てくる）

linaje という別称からも祖先神としての位置づけが読みとれる、ただし、人間が寝て起きたところで、山岳神が出てきて話しているパターンもある

（3）フアン・エスコペタ（Juan Escopeta）――大柄で巨力の子ども、ショットガンを操るところから名前がついた

Gutmann はケチュア語圏の北の方で（ペルーからエクアドルにかけて）記録があると述べている（p.197）→ただし、怪力をもつ子どもが様々な試練をくぐり抜けるという物語の設定と展開自体は、Jukumari / Juan de oso とよく似ているとも言えそうだ

Hinaspa, riki, curaqpi wachakusqa, curaqpi empleada kashaspa. Hinaspa kay Juan Escopetaqa, sutinqa kasqa Juan. Hinaspa pero asnu hina peloyuq kasqa wawa. (p.198)

(Así siendo, ¿no?, en donde el cura había dado luz, en donde el cura empleada siendo. Así siendo este Juan Escopeta, su nombre había sido Juan. Así siendo pero como burro con perro había estado el wawa.)

フアン・エスコペタは動物的な要素を兼ね備えており、おそらくそれにより超人的な力の強さを手に入れている
フアン・エスコペタは saqra (diablo)に連れて行かれ、様々な試練に晒される→saqra の鼻を明かし（condenado と戦って勝つバージョンもある）、豊かになる（例：アシエンダ領主になる）

> Hinaspa chaypi quedapusqa Juan Escopetaqa hacendado. Chay wasiq dueñon quedapusqa. (p.210)
> (Así siendo en ese lugar se había quedado, Juan Escopeta, hacendado, de esa casa como su dueño se había quedado.)

※アイマラ語研のペドロ・ウルティマラ（Pedro Urtimala）――様々なかたちでアシエンダ領主や軍人や神父の鼻を明かす

（4）動物の物語
動物たち同士が関係する物語――言葉を通じて異なる種の間で意思疎通ができる、それぞれの種としてのキャラクターがあり、それぞれの種が「動物」的な特徴と「人間」的な特徴（文化）を兼ね備えている（コンドルが娘を誘拐する、コンドルとキツネの我慢比べ、キツネがアヒルにだまされるなど）
動物と人間が関係する物語――人間は基本的に動物に騙される、動物の側の意向を人間は分かっていない

> “Maypitaq, papáy, qurpachaykimanri? Kuskay´puñukusunchis, riki. Kuskallapunin visitaykuwanqa puñukuyku”, nispa nisqa. (p.288)
> “¿Y dónde pues, papáy, podemos alojarte? Juntos pues nos dormiremos, ¿no? Juntos nomás siempre con nuestras visitas nos dormimos” diciendo había dicho.

→このような言葉で旅人の男を誘惑しつつ、ノミの姉妹が人間を食べてしまう
自分が料理したスープを食べてしまった犬を殺した旅人が、犬社会の判事などの上役たちに当該の犬への虐待を糾弾され、食い殺される
※アイマラ語圏の物語の特徴と同じであり、そもそも共通で知られている物語も多い
分かり合えない得体の知れなさのなかで、人間は動物と関係をしている
参考――藤田護（2023）「口承の物語に現れる人間と動物の関係を読み直す――南米アンデス高地のアイマラ語と北東アジアのアイヌ語の物語テクストから」宮代・山本編『言語文化と政策（シリーズ総合政策学をひらく）』慶應義塾大学出版会、pp.61-76。

Durston, Itier, y Landeo Muñoz (2024)
物語自体のバリエーションはそれほど大きくない
（「神話」と位置づけられるような物語がない、その土地独自の伝承と位置づけられそうな物語もない）
村の具体的な民俗習慣や歌と組み合わせて記録されていることが興味深い
（ただし『ワロチリ文書』にみられる、ワカたちの時代→インカとワカたちの時代→同時代としてのスペイン植民地時代という時代的連続性はみられない）
※ただし、広域に知られる物語と、その土地独自の伝承という区別は、上で見たようにそれほど厳密に分けられるわけではない

3. 語りの文体

アイマラ語もケチュア語も、自身が確証をもって語る場合と、人から伝え聞いて知った内容を語る場合を、文法的に区別しなければならない

アイマラ語の口承文学の語りの特徴
動詞の活用として「遠隔過去」(pasado remoto:自身が体験していない過去のことを語る、自身が体験した過去を語る近接過去 pasado cercano と区別される)を用いつつ、動詞「saña(言う)」を随所に挿入し(動詞 saña は日本語の「〜とさ」のように用いられる)、さらに推量を示す動詞の活用の形式を組み合わせる
3 人称単数では、遠隔過去の動詞の活用語尾は-tayna または-täna、動詞 saña は si、推量を示す動詞の活用は-chi となる——

> Ukat jichhax, kuna uray mistsuñapäx**chi** ukan, ukax mistsunxarakiw **si**y, mistsunxaraki**taynaa**y. (Después ahora (a) qué hora pues debería salir ahí, ese ya ha salido, dice pues, ya había salido pues.)(そしてさて、何時かに[若い男は]そこを出たはずだ、そいつはもう出ていったと言うんだ、もう出ていったのだとさ。)

タピア・デ・アルバレス、アスンタ、ペドロ・サラビア・パロミーノ、フリアン・タピア、藤田護(2015)「南米ボリビアのラパス県渓谷部のアイマラ語口承テクストとその考察——蛇の力を得た娘の伝承」、『京都ラテンアメリカ研究所紀要』第 15 号、pp.115-152。
ただし、推量-chi が用いられない地域も多い

ケチュア語の場合には、伝聞を示す形式が 2 種類ある
(1)母音の後に-s、子音の後に-si という形をとる接尾辞をつける。確証をもって話す場合の母音の後に-m(または-n)、子音の後に-mi という形をとる接尾辞と対照を成す。
(2)動詞の活用語尾に 3 人称単数で-sqa という形を用いる。3 人称複数で-sqaku となる。
※『ワロチリ文書』においては、-sqa という形が過去分詞形成としてしか用いられず(←この過去分詞形成の方が元々の役割と考えられる)、伝聞を示す形式としては用いられない。伝聞を示す形式としては、-s/-si のみが用いられる

Durston, Itier, y Landeo Muñoz (2024)
最初は-sqa と-s/-si を併用して語り始め、徐々に-s/-si だけを用いて動詞は単純形(現在形)で活用させるようになることが多い

> 語り出しの箇所の例(該当箇所を太字にした)
>
> Urqupi**s** atuq ukuchawan tiya**sqa**. Ninaku**sqaku** “kumpari, kunanmi santunchik” nispa. Atuqñataq ni**sqa**, “kumpari, hitarrata tukamuchkay”. Hinaspañataq**si** ninawan kañayku**sqa**. (p.67)
>
> (En el cerro, dicen, con un ratoncito había vivido. Habían dicho entre ellos “compadre, ahora es nuestro santo (cumpleaños)” diciendo. Y el zorro ya había dicho, “compadre, guitarra estate tocando”. Y siendo así, dicen, con el fuego la había quemado.)

→同じ文のなかで動詞を-sqa で活用させ、副詞句に-s/-si をつけている

> 同じ物語の語り終わりの箇所

Hinaspa**s** mancharikun. Hinaptin**si** pilunpas sayaririrparinraq. Hinaptin**si** rimapakun “ampi kaspanchá purikuchkan kaypi wakpi”. Hinaspan**si** nin “amaña kumpari puriychu, manachu saykunki? Samakamuyña, mana chaypachaqa diyuspas kastigasunkimanmi” nispa**s** nin, hinaspa pasakun.（p.69）

(Siendo así, dicen, se ha asustado. Siendo así, dicen, su pelo también se ha parado todavía. Siendo así, dicen mucho ha hablado, “zonzo siendo se está andando aquí y allá”. Siendo así, dicen, ha dicho “compadre, ya no andes, ¿no te has cansado?. Descansa ya, sino el dios también te puede castigar” diciendo ha dicho, siendo así se ha ido.)

本来、よりケチュア語独自の証拠性の表示は-s/-si であり、-sqa を動詞の活用として用いるのはアイマラ語との接触が長く続いた南部のケチュア語の特徴だと考えられる→このことがこの文体の採用に影響しているか？

Gutmann (2023b)

-sqa と-s/-si を併用するものも多い、かつ最初から-s/-si しか用いないものもある

加えて……

最初から単純形（現在形）しか用いられない物語もある——

Sapanka runa unqun, riki. Unqun chayqa, chayman linajeqa chayamun wahachikuqtinku kay Awsangatipis. Awasngatipis chayamun kay espuelasniyuq. (p.32)

(Cada gente se enferma, ¿no? Cuando se enferma, a eso el linaje llega haciéndolo llamar este Ausangate también, Ausangate también llega con este espuelas.)

→「物語」として具体的な展開をもっているが、でも現在においても実際に行われていると推定できる内容で、民俗習慣として語っているためすべて単純形（現在形）で語られるのではないか

動詞 parlay「話す」や niy「言う」を多用する物語もある——

Condenado, pero mana riqsinichu, mana riqsinichu.

Rimallankun, “condenado purinku” nispa, “llaqtakunata purin urqukunata rin, Awsangatita chayan” ninku, “condenado Awsangatita chayan” ninku.

(Condenado pero no conozco, no conozco.

Hablan nomás, “el condenado camina” diciendo, “por los pueblos camina, por los cerros va, a Ausangate llega” dicen, “el condenado a Ausangate llega” dicen.)

→本人はあまりよく知らないとも述べており、実際に物理的に他人から聞いたことを強調しようとするとこのような文体になるか？

仮説——Margit Gutmann の方が様々な種類の物語（cuentos）を集めようとしていて、かつより会話的な環境の中で記録している（Durston, Itier, y Landeo Muñoz (2024)の場合、おそらく元の文書は『ワロチリ文書』同様に筆録されている）。対話的状況のなかで、より語用論的な（プラグマティックな）意図が話者のなかで前面に出てくると、文体のバリエーションが大きくなるのではないだろうか

参考——Mannheim, Bruce and Kristina Van Vleet (1998) “The Diaglogics of Southern Quechua Narrative.” *American Anthropologist*, Vol.100, No.2: pp.326-346.

Fin de documento